

平成30年1月5日発行(毎月5日1回発行)  
第58巻1月号(通巻702号)

# 風土



1

なにさがす起居や鷓耳にゐて

(句集『竹取』より昭和四十二年作)

この句には「十一月二十七日神山杏雨死す」と前書きがあります。神山杏雨は広告会社の社長で「風土」という俳句の社内報を出していました。だんだん人数が増えたので、桂郎師に選を頼み、更に会社の機関紙から独立させ俳句雑誌「風土」が出発したのです。ですから厳密には初代「風土」主宰は神山杏雨なのです。世話になった杏山氏の訃報に接した動揺が「なにさがす起居や」に現れています。

年賀すに藁縄縋ひ機停めもせで

(句集『竹取』より昭和四十三年作)

この句にも「戦後二十三年(そけえもの)扱ひ未だつづく」という前書きがあります。この頃には「風土」主宰としてはもちろん、小説家としても充実しています。しかし近所の農家はそのようなことはお構いなしです。年賀の挨拶に訪れても縄縋ひ機を止めようともしません。そっけない態度に「疎開者」と農家の心の隔たりを感じざるを得ない桂郎師がいます。

桂 郎 忌 天 より 烏 瓜 は づ す

(句集『木守』より昭和六十三年作)

この句は桂郎師の「明史来ぬひようと掲げきて烏瓜」を踏まえた句です。欠席と思っていた浜明史氏が、体調を回復して鍛練会にひよっこりと現れたのを大変喜んだのです。手には真っ赤な「烏瓜」。器師はこのエピソードを踏まえ、二人の師弟愛を、また器師と明史氏との兄弟弟子愛を「烏瓜」で象徴しました。

百 打 っ て 鮭 打 ち 棒 の こ ろ が れ る

(句集『心後』より平成三年作)

この句はみちのくの旅で、鮭漁を目の当たりにした時の写生句です。網から揚げた鮭の頭をすばやく棒で打ち、腹を裂いて「はららご」を取り出し、雄鮭の精液をかけるのです。漁場は騒然としてまさに修羅場です。「鮭打ち棒のころがれる」の突き放したような表現がリアリティを生んでいます。このほかにも「みちのくや鮭に婚姻色の現れ」や「山眠る孵化して鮭に目のつきぬ」など、器師の「命ふたつ」の命をありのままに見つめるまなざしが表現在定着しています。

水かげろふ  
南うみを

悼 野沢しの武さん

寒露美し君子の交をつらぬきて

どんぐりのめり込んでゐるひづめ跡

夕されば鹿に獣の目のもどる

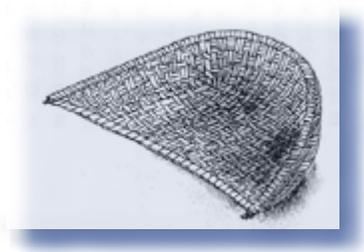
檻罾にうづくまる影十三夜

上野にて鍛錬云 三句

もみあうて不忍の蓮破れんとす

台風を西郷どんの肩が切る  
台風過不忍の闇あらたにす  
存分に日差しに冷えし柿を挽ぐ  
みづうみの水かげろふに柿を干す  
横に飛ぶ比良の木の葉や蕎麦を打つ  
蕎麦旨しあふみの蕪漬うまし  
高々と荃石積んで湖北なる

「ウエップ俳句通信」一〇二号掲載句を含む



# 竹間集

同人作品



小鳥来る

高村令子

この星は命棲む星小鳥来る  
五六本剪つて芒の風担ぐ  
花芒石置くだけの行者墓  
園児散り花野の雲をはみ出せり  
あるがまま生きて米寿や石路の花  
支へ合ふものに命や鳥渡る  
背の児の命重たし大月夜

上野の台風

柿沼 盟子

秋湿る観音堂に灯を献ず  
銀杏のこぼるに任す子規球場  
雨激し鴨の声なほ激し  
頭を寄するスワンのボート台風来  
蓮は実<sup>に</sup>葉裏は雨の空のいろ  
吹き降りに紙濡らすまじ台風圏  
雨風をマイクの拾ふ台風裡

菊 繪

土井 三乙

秋冷の朝市に買ふシャープナー  
犬と来る僧の声清み露の坂  
秋草に寝ころびたるはいつのこと  
岳暮れて家々に灯や菊繪  
こので杯を擱かうかちちる虫  
師は悼む野炊しの武先生けふも萩の乱れに立ち給ふ  
鴨の来て師の家の庭賑ははす

火恋し

林 いづみ

白山茶化のぼるや雨の無縁坂  
台風の雨の二の脚三の脚  
身に人むや頭は下を向く昇り龍  
ハシビロコウ片翅ひろぐそぞろ寒  
鳥渡り来てそれぞれの闇を負ふ  
火恋し生後十日のゴリラの子  
風邪心地いそつぷ橋を戻りけり

蓮玉庵

小林 共代

考と酌む蓮玉庵の走り蕎麦  
新高麦や安政六年よりの店  
蓮の実とぶ奏楽堂に音のなく  
穂薄の力を抜きし池の端  
仏頭にひきこもらずに黄落す  
藁師草百坊の跡光をり  
竜潜む天龍橋に雨しとど

ロダンの像

中根 美保

駄菓子屋に売る遊漁券鯊の秋  
山よりの風を引き寄せ豆筵  
掛け替はる村のキネマや賤日和  
穂絮とぶ外つ国人の乳母車  
飛ぶ虫のゆらりと昇る木賊かな  
そぞろ寒ロダンの像のよぢれやう  
実を飛ばし尽くして蓮の化石めく

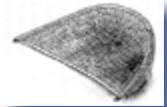
鷹の渡り

間島あきら

上野銀会 三句  
木の実打つ師の一喝と思ひけり  
夜を鳴きし鴨に記憶の蘇る  
秋澄むやたしかに聞こゆ師の一語  
霧を吐く山の息つぎする夜かな  
新秋の湖畔に高倉健の椅子  
行く秋のこ糸水に聞く石に聴く  
全天を真二つ鷹の渡りかな

# 山河集

同人作品



南うみを選

秋雨に軽く駆け出す麒麟の子  
鹿の角上野の森の闇に立つ  
露寒や江戸の鬼門の寺の鐘  
器うみをの色紙掲げり鳥渡る  
秋天へ五重塔の貫きぬ

中嶋陽子

再会の上野公園紅葉す  
銀杏の落ちて転げて子規の句碑  
敗荷となる順を待つ雨の中  
秋霖や「地獄の門」の堅く閉づ  
西方を向く蓮の実の高さかな  
上京す台風予報ばかり聞き  
秋霖に東京の磁場狂ひ出す  
破れ蓮池面の風の吹き溜り

森高武

上辻蒼人

色鳥を隠して木々のしずり雨  
木の実集めて側溝のどん詰り  
身に入むやコンドル飛べぬ羽根を持ち  
うそ寒や一枚ガラスに虎の来る  
無縁坂色なき風に添ひ登る  
おみくじの吉の一步や小鳥来る  
台風裡爪ををさめて虎眠る  
藩校は尊攘の軸掲げて冬  
翅と脚つぶさにつぶれいぼむしり  
清澄や名月はいま膝の上  
駅に子を待つ月の出を待つやうに  
年輪の密なしづけさ小鳥来る

片桐紀美子

山田健太

四股踏んで

豎山道助

青蜜柑たわわアフリカ見ゆる丘  
着陸か離陸か摩天楼の秋  
秋燕焦土に詩集売りし日も  
枝豆に老いも若きもなかりけり  
釣瓶落とし昔公候伯子男  
秋刀魚焼く同棲三日目の厨  
粕汁や桂郎の世は復と来まし  
二百十日幼稚園子の咀嚼音



---

三島忌の開かぬままの落下傘  
牡蠣啜り邪馬台国の位置決まる  
霾るや書架より落つる『西遊記』  
啄木の多喜二の小樽鳥帰る  
四股踏んで玄関を出る大試験  
永き日の歩いて降りる百二階  
更衣へて四面ガラスのビルに入る  
一本の桜と棲みて老いにけり  
焚刑のフス思ふべし灼けるなり  
大足の太宰治の忌なりけり  
峰雲や餞別は『出埃及記』  
萍やいざ鎌倉の檄を待つ

二十句

山田健太

秋晴れや妻二階より降りて来ず  
青空のはりつめてゐる木の実かな  
下顎で押さへて運ぶクリスマス  
冬の日を呼吸してゐる紬かな  
埋火の如き顔して占師  
鶏鳴の淑気満ちゆく伽藍かな  
家傾ぐほど布団干す店子かな  
恋猫の糞ともなれば屈み見る



---

遠足の子の囲みたる蛇口かな  
ふらここを待つあと一人あと一人  
犬吠の春を虚子の句春夫の詩  
家見えて来て走り出す入学児  
黒揚羽太郎の目玉語り出す  
母屋より持つて来るは蠅叩  
薫風や顎に抜け行く子のあくび  
母衣蚊帳の赤子のでべそ皆誉めて  
いただいて来しはメロンと蠅叩  
定食に妻白玉を追加して  
噴水の頂きにある人の癖  
炎天を売りに出したる男かな

蒲公英

片桐紀美子

飲み口のやさしきカップ小鳥来る  
葉月潮沖に動かぬ漁の火  
コスモスや間口七間旅籠跡  
雲中に一すじの日矢実むらさき  
大仏の背山黙せり神無月  
古民家に薪の火煙る朝時雨  
堂奥に玉眼ひかり竜の玉  
蛇行せる川の息つぎ去年今年



---

朝食のパンの焦色四日かな  
加賀白山川音に沿ふ初詣  
初天神日の高さまで絵馬かかぐ  
かたかごや窯の里へと伸びる道  
入り彼岸明けたる堂の竜鳴かす  
蒲公英や日をつかみつつ子の歩み  
ついと出る地方なまりや葱坊主  
夏近し駅のベンチの海に向く  
青嵐山深く座す薬師仏  
夏つばめ一閃放つ船だまり  
古書店のあるじ寡黙や夏ともし  
朝日受く子規の目線に咲く糸瓜

# 風土独語／南 うみを



秋雨に軽く駆け出す麒麟の子

中嶋 陽子

佳き句には読み手の想像を広げてくれるポイントになる言葉があります。それが「軽く駆け出す」です。この言葉により「秋雨」が強いものではなく、やわらかで明るいものであることが解ります。そこを少しだけ駆ける「麒麟の子」の表情も見えます。

櫛削る木屑透きたり秋ともし

森田 節子

この句のポイントは「木屑透きたり」です。櫛という繊細なモノ作りです。職人の巧みな技により削られる木屑の細くて薄いことよ。秋の灯の下で黙々と励む職人に作者は感じ入っています。

敗荷となる順を待つ雨の中

森 高武

秋になると蓮の葉は破れ、「敗荷」となり、さらに枯れて、最後は枯れた茎だけ残る「蓮の骨」になってしまいます。そのような過程の中で、それぞれ順番があるのだと作者は認識したのです。擬人化していますが、蓮の高さと大きな葉は人物の立ち姿を想像させます。雨がさらに破れをうながしています。

秋淋しジュラ紀の化石撫づるとき

豎山 道助

「ジュラ紀」は今から二億年前の恐竜全盛の時代です。人類から遡れば果てしない昔の恐竜の「化石」に触れ、その盛衰に想いを馳せた時、「秋淋し」と心情がこぼれたのです。この「秋」は

恐竜という類の絶滅を含んでおり、作者独自の表現世界です。

木の実集めて側溝のどん詰り

上辻 蒼人

木の実のは山であれば、鳥や獣の餌となり、また落ちた木の実の幾つかは芽を出し、次の世代の樹木へと成長します。しかし都市部の公園や並木の木の実は、大抵はゴミとして処理されます。この句は、都市部の木の実のゴミになる前の姿を描写しています。

やや寒しきりんの膝の座り胼胝

平田きみこ

動物園での作です。それを如実に示すのが「膝の座り胼胝」です。動物園の狭いスペースでは座ることが多いのです。またこの「きりん」はだいたい年齢を加えていることも解ります。「やや寒し」は皮膚感覚と共に「きりん」への心情も重ねています。

うそ寒や一枚ガラスに虎の来る

片桐紀美子

これも動物園の作です。季語も同じような使い方をしています。が、「虎」の野生に対する畏怖が選んだ季語です。鉄柵でなくガラスの向こうから来る「虎」の全身の迫力に驚いているのです。

下町の屋号木彫や走り蕎麦

下山田美江

東京のビル街に囲まれた、明治や昭和の時代を残す下町です。蕎麦の老舗でしょうか。看板の屋号は木彫りです。この木彫りを目当てに蕎麦好きが集まるのです。今年初めての蕎麦が茹であがりました。少し青みがかった蕎麦のコシも風味も格別です。(以下略)

# 風土集



## 南うみを選

櫛削る木屑透きたり秋ともし

川崎

森田 節子

銀杏の嵩を踏まじと子規球場

大き葉のへそに溺れて秋の蜂

敗荷の真中浮き立つ御堂かな

みはるかす蓮葉のさやぐ台風過

目葉の美しき名や保己一忌

川崎

豎山 道助

見失ふ点字ブロック霧の中

山粧ふ献花台置く八合目

草紅葉だけ生きてゐる聖麁墟

秋淋しジュラ紀の化石撫づるとき

雨に沁む旧岩崎邸の秋灯

横領賀

平田きみこ

きしきしと雨の玉砂利木の実落つ

欄干の艶の深さや石路の花

やや寒しきりんの膝の座り胼胝

漆黒の河馬でんとゐる台風圏

窯出しの貫入深し暮の秋

平塚

片桐紀美子

出来ばえを空に透かして松手入

白菊の群るる寺領の釣瓶井戸

湯ざめして窓に明かりの鋭かり

空堀の風抜ける道木の実落つ

子規の句碑ポール浮き出す秋時雨

いわき

森 高武

台風の中ゆるやかに路線バス

敗荷の中芭蕉碑の直立す

怖き絵を見たさに並ぶ野分中

秋深し足指太きロダンの像

扇風機片付けてゐる社務所かな

水戸

山田 健太

秋の日に掛けて大政奉還図

縁側に足を垂らして月見かな

鎌の刃におんぶばつたの飛び来る

茸狩や祖父母の家にまづ寄りて